

留学を終えて

関高等学校 瀧下 耕熙（アメリカ合衆国）

カリフォルニアでの約1年間の留学生活は本当に「かけがえない1年」でした。まずは、私を支えてくださったすべての方々に感謝を述べたいです。振り返れば、実に多くの人に支えられて叶った留学であることに気づきます。この1年で私は、視野・価値観・人間関係などのすべての変化を通して心が豊かになったと強く感じます。異文化の中で毎日新しい発見と驚きに出会い、自分自身の考え方や感じ方に深みが増しました。



現地では、ホームステイ先の家族や教会の方たちと一緒に日本料理を作り、故郷の郡上踊りを紹介するショートムービーを制作して学校や留学生交流会で披露するなど、ただ「学ぶ」だけでなく「交わる」体験を重ねました。しかし、決して文化交流の中でうまくいったことばかりではありませんでした。

ホストファミリーは日本の料理が好きで、寿司やラーメンのレストランに行くことがしばしばありました。しかし、日本の料理が好きだという言葉とは裏腹に、そこに並ぶのはカリフォルニアロールやキュウリとレモンが浮かぶラーメンで、どれも私の知る本当の日本料理とはほど遠く思え、和食とは言いがたいものでした。そして、ホストファミリーはそれらを本当の日本料理だと認識していました。私はその場で違いを説明し、理解してはもらえましたが、心はどこか晴れないままでした。



数か月後、ホストマザーと家で一緒にカリフォルニアロールを作ることがありました。まだ心にどこかもどかしい思いが残っていたのか、私は何気なく「日本の料理はなぜアメリカでこんなに人気なのか」と尋ねました。その答えは、ホストマザーが思うに「寿司やラーメンは自由にアレンジできて楽しいから」とのことでした。その言葉を聞いた瞬間に、私の中で何かがはじけました。私はそれが日本食の良さだと言われるまで気づいていませんでした。ホストマザーの言葉から私は、日本文化を別の角度から見つめる機会を得ました。異文化は違いがあるからこそ面白いと言われたように感じたと同時に、今までの自分を振り返って深く恥ずかしい気持ちにもなりました。それまでの私は、理解しがたい文化の違いを納得するために「本物・偽物」という狭い枠で物事を見ていました。寿司やラーメンには「こうでなければならない」という凝り固まった考え方はなく、伝統を重んじながらも、世界の誰でも楽しめるように「こうしてみてもどうだろうか」という広い視点を持って固定観念を打ち砕くことが、私にはできていませんでした。もとより、カリフォルニアロールも、キュウリやレモンの入ったラーメンも、日本からアメリカに持ち込まれ、アメリカで独自に育った立派な“アメリカ文化”であり、本物も偽物も無いのです。

アメリカ留学を振り返り、この経験は私にとって大変大きな出来事であったと言えます。人と人との交流の本質は違いを正すことではなく、違いの奥にある背景や価値観を尊重し合うことだということを体得することができたからです。留学期間中、全く知らない新しいことに会ったり、解釈のずれや視点の行き違いが起こったりすることがよくありました。しかし、その摩擦があるからこそ互いに気づかなかった新しい視点を分かち合えました。大切なのは、相手の文化を心から尊重して知ろうとし、決して最初から否定しないことであると学びました。

このような視点の変化は、学校生活でも起こりました。通っていた現地の高校では、朝食と昼食が給食のように無償で提供されていました。さらに、キャンパス内にはコーヒーやお茶を無料で自由に飲めるスペースがあり、ドーナツやピザまで並ぶ日もありました。日本では考えられないような、生徒の学校生活が少しでも楽しくなるような自由で開かれた制度に、私は驚かされました。自分が日本の良さに気づかせてもらったように、アメリカの良さを少しでも友人と共有できればと思い、現地の友達にフリーミールに対する自分の考えを伝えました。



ある話では、アメリカは様々な面で5～10年後の日本を映し出しているのだそうです。帰国直後、「岐阜県の高校でも給食導入を検討中」という新聞記事を読んだとき、アメリカの高校で提供されたフリーミールを思い出し、その話が現実味を帯びて感じられました。日本は10年後どうなっているのか興味があります。世界は絶えず動き、交わり、変化しています。その流れの中で、私も誰かの役に立てる人でありたいです。カリフォルニアで過ごしたかけがえのない1年で、私は文化の多様性や共生の大切さを学ぶことができました。心の中に芽生えたこの学びを見失わず、これからの人生で大切に育てていきたいです。